

日蓮大聖人御書全集

きょうだいししょう

兄弟抄

新版
1468
ゝ
1481

きようだいしよう

兄弟抄

けんじ ねん がつ さい いけがみむねなか いけがみむねなが

建治2年('76) 4月 55歳 池上宗仲・池上宗長

そ ほけきよう もう はちまんほうぞう かんじん じゅうにぶきよう こつずい

夫れ、法華経と申すは、八万法蔵の肝心、十二部経の骨髓

さんぜ しょうぶつ きよう し しょうがく じよう じつぽう

なり。三世の諸仏はこの経を師として正覚を成じ、十方

ぶつだ いちじよう がんもく しゅじよう いんどう たも

の仏陀は一乗を眼目として衆生を引導し給う。

いま げん きようぞう い み ごかん えいへい とう

今、現に経蔵に入つてこれを見るに、後漢の永平より唐

まつ いた わた いっさいきようろん にほん

の末に至るまで渡れるところの一切経論に二本あり。いわ

くやく きよう ごせんしじゅうはつかん しんやく きよう

ゆる旧訳の経は五千四十八卷なり。新訳の経は

しちせんさんびやくくじゅうくかん か いっさいきよう みなおのおのぶんぶん したが

七千三百九十九卷なり。彼の一切経は皆各々分々に随つ

われだいいち

名乗

ほけきよう

かれ

きようぎよう

て我第一なりとなのれり。しかれども、法華経と彼の経々

ひあ

み

しょうれつてんち

こうげうんでい

とを引き合わせてこれを見るに、勝劣天地なり、高下雲泥

かきようぎよう

しゅしょう

ほけきよう

つき

なり。彼の経々は衆星のごとく、法華経は月のごとし。

かきようぎよう

とうこ

せいげつ

ほけきよう

だいにちりん

彼の経々は灯炬・星月のごとく、法華経は大日輪のごと

そとう

し。これは総なり。

べつ

きようもん

い

みたてまつ

にじゅう

だいじ

別して经文に入つてこれを見奉れば、二十の大事あり。

だいいちだいに

だいじ

さんぜんじんてんごう

ごひやくじんてんごう

もう

ふた

第一第二の大事は、三千塵点劫・五百塵点劫と申す二つの

ほうもん

さんぜんじんてん

もう

だいさん

まき

けじようゆほん

もう

法門なり。その三千塵点と申すは、第三の卷の化城喩品と申

ところ

い

そうろう

さんぜんだいせんせかい

まつ

ちり

す処に出でて候。この三千大千世界を抹して塵となし、

とうほう

む

せん

さんぜんだいせんせかい

す

いちじん

くだ

東方に向かつて千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し、ま

せん

さんぜんだいせんせかい

す

いちじん

くだ

た千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し、かくのごとく

さんぜんだいせんせかい

ちり

くだ

果

くだ

さんぜん

三千大千世界の塵を下しはてぬ。さて、かえつて下せる三千

だいせんせかい

くだ

さんぜんだいせんせかい

押

総

大千世界と下さざる三千大千世界をともしおしふさねてま

ちり

もろもろ

ちり

並

置

いちじん

た塵となし、この諸の塵をもつてならべおきて、一塵を

いっこう

へつ

はじ

はじ

一劫として、経尽くしては、また始めまた始め、かくのご

かみ

もろもろ

ちり

つ

へ

さんぜんじんてん

もう

とく上の諸の塵の尽くし経たるを三千塵点とは申すなり。

いま

さんしゅう

しょうもん

もう

しやりほつ

かしよう

あなん

らうん

今、三周の声聞と申して、舍利弗・迦葉・阿難・羅云な

もう

ひとびと

かこおんのんごう

さんぜんじんてんごう

んど申す人々は、過去遠々劫・三千塵点劫のそのかみ、

だいとうちしようぶつ　もう

ほとけ　だいじゅうろく　おうじ

ぼさつ

大通智勝仏と申せし仏の第十六の王子にておわせし菩薩

ぼさつ

ほけきよう　なら

あくえん

賺

ましましき。かの菩薩より法華經を習いけるが、悪縁にすか

ほけきよう

捨

こころ付

されて法華經をすつる心つきにけり。かくして、あるいは

けこんぎよう

墮

はんにやきよう

だいじつきよう

華嚴經へおち、あるいは般若經へおち、あるいは大集經へ

ねはんきよう

だいにちきよう

おち、あるいは涅槃經へおち、あるいは大日經、あるいは

じんみつきよう

かんぎようとう

あごんしようじようきよう

深密經、あるいは觀經等へおち、あるいは阿含小乘經へ

しだい　お

のち

にんてん

おちなんどしけるほどに、次第に墮ちゆきて、後には人天の

ぜんこん

のち

あく

お

善根、後に悪におちぬ。かくのごとく墮ちゆくほどに、

さんぜんじんてんごう

あいだ

たぶん

むけんじごく

しょうぶん

しちだいじごく

三千塵点劫が間、多分は無間地獄、少分は七大地獄、た

いっぴやくよ　じごく

がき　ちくしよう　しゅら

またまには一百余の地獄、まれには餓鬼・畜生・修羅なん

う　だいじんてんごう

へ　にんてん　う　そうら

どに生まれ、大塵点劫なんどを経て、人天には生まれ候い

けり。

ほけきよう　だいに　まき　い　つね　じごく　しよ

されば、法華經の第二の卷に云わく「常に地獄に処するこ

おんかん　あそ　よ　あくどう　あ

おの　しやたく

と、園觀に遊ぶがごとく、余の惡道に在ること、己が舍宅の

とううんぬん　じゆうあく　ひと　とうかつ　こくじよう　もう

ごとし」等云々。十惡をつくる人は等活・黒繩なんど申す

じごく　お　ごひやくしよう　いつせんさい　へ　ごぎやく

地獄に堕ちて五百生、あるいは一千歳を經、五逆をつくる

ひと　むけんじごく　お　いつちゆうごう　へ　のち　しろう

人は無間地獄に堕ちて一中劫を經て、後はまたかえり生

そうろう　ほけきよう　捨　ひと

ず。いかなることにや候らん、法華經をすつる人は、す

とき

ふぼ ころ

夥

つる時はさしも父母を殺すなんどのようにおびただしくは

見 そら

むけんじごく

お

たこう

へそら

みえ候わねども、無間地獄に堕ちては多劫を経候。たと

ふぼ

ひとり

ふたり

じゅうにん

ひやくにん

せんにん

まんにん

じゅうまんにん

い父母を一人・二人・十人・百人・千人・万人・十万人・

ひやくまんにん

おくまんにん

ころ

そら

さんぜんじんてん

百万人・億万人など殺して候とも、いかんが三千塵点

へそら

いちぶつ

にぶつ

じゅうぶつ

ひやくぶつ

せんぶつ

まんぶつ

をば経候べき。一仏・二仏・十仏・百仏・千仏・万仏、

ないしおくまんぶつ

ころ

ごひやくじんてん

へ

乃至億万仏を殺したりとも、いかんが五百塵点劫をば経

そら

ほけきょう

捨

そら

罪

候べき。しかるに、法華経をすて候いけるつみによりて、

さんしゅう

しょうもん

さんぜんじんてん

へ

しょだいぼさつ

ごひやくじんてん

三周の声聞が三千塵点劫を経、諸大菩薩の五百塵点劫を

へそら

覚

そら

経候いけること、おびただしくおぼえ候。

栓

いぶし

こくう

う

拳

痛

せんずるところは、拳をもつて虚空を打つはくぶしいた

いし う

あくにん

ころ

つみ

からず、石を打つはくぶしいたし。悪人を殺すは罪あさし、

ぜんにん

ころ

つみ

たにん

ころ

こぶし

善人を殺すは罪ふかし。あるいは他人を殺すは拳をもつて

どろ う

ふぼ

ころ

こぶし

いし

う

泥を打つがごとし、父母を殺すは拳もて石を打つがごとし。

しか 吠

いぬ

こうべ 破

しし

ほ

いぬ

はらわた

腐

鹿をほうる犬は頭われず、師子を吠うる犬は腸くさる。

にちがつ

呑

しゅら

こうべしちぶん

破

ほとけ

う

だいば

だいち

日月をのむ修羅は頭七分にわれ、仏を打ちし提婆は大地

破

い

しやたい

つみ

きやうじゆう

われて入りにき。所対によりて罪の軽重はありけるなり。

ほけきやう

いっさい

しよぶつ

がんもく

きやうしゆしやくそん

されば、この法華経は、一切の諸仏の眼目、教主釈尊の

ほんし

いちじいってん

捨

ひと

せんまん

ふぼ

ころ

本師なり。一字一点もすつる人あれば、千万の父母を殺せ

つみ 過 じつぼう ほとけ み い い つみ 超
る罪にもすぎ、十方の仏の身より血を出だす罪にもこえて

そうら さん ご じんてん へそうら

候いけるゆえに、三・五の塵点をば経候いけるなり。こ

ほけきよう 置 きよう きよう

の法華経はさておきたてまつりぬ。またこの経を経のご

説 ひと あ かた そうろう いちげん かめ

とくにとく人に値うことが難きにて候。たとい一眼の亀

う ぎ あ 蓮 糸 しゅみせん

は浮き木には値うとも、はちすのいともつて須弥山をば

こくう 懸 ほけきよう きよう と ひと 値

虚空にかくとも、法華経を経のごとく説く人にあいがたし。

じおんだいし もう ひと げんじようさんぞう みでし たいそう

されば、慈恩大師と申せし人は、玄奘三蔵の御弟子、太宗

こうてい おんし ぼん かん そら 浮 いっさいきよう むね 湛

皇帝の御師なり。梵・漢を空にうかべ、一切経を胸にたた

ぶっしやり ふで 先 ふ きば ひかり はな たま

え、仏舍利を筆のさきより雨らし、牙より光を放ち給いし

しようにん

とき

ひと

にちがつ

くぎよう

のち

ひと

がんもく

聖人なり。

時の人も日月のごとく恭敬し、後の人も眼目と

かつごう

でんぎようだいし

責

たも

こそ渴仰せしかども、伝教大師これをせめ給うには、

ほけきよう

ほ

かえ

ほつけ

こころ

ころ

とう

「法華経を讃むといえども、還つて法華の心を死す」等

うんぬん

いうこころ

か

ひと

こころ

ほけきよう

讃

云々。言は、彼の人の心には法華経をほむとおもえど

り指

ほけきよう

ひと

ぜんむい

も、理のさすところは法華経をころす人になりぬ。善無畏

さんぞう

がっしこく

鳥

仗

那

こくおう

くらい

捨

しゅつけ

三蔵は月支国のうじような国の国王なり。位をすて出家し

てんじくごじゆうよ

くに

しゅぎよう

けんみつにどう

極

のち

て、天竺五十余の国を修行して顕密二道をきわめ、後には

かんど

げんそうこうてい

おんし

しな

にほん

しんごんし

漢土にわたりて玄宗皇帝の御師となる。戸那・日本の真言師、

たえ

ひと

流

尊

ひと

誰かこの人のながれにあらざる。かかるとうとき人なれど

いちじ とんし えんま 責 遭 たも
も、一時に頓死して閻魔のせめにあわせ給う。いかなりけ

故

ひと

にちれん

勘

もと

るゆえとも人しらず。日蓮これをかながえたるに、本は

ほけきよう

ぎようじや

だいにちきよう

み

ほけきよう

勝

法華經の行者なりしが、大日經を見て法華經にまされり

言

故

といいしゆえなり。

しやりほつ

もつけんれんとう

さん

ご

じんてんごう

へ

されば、舍利弗・目犍連等が三・五の塵点劫を経しこと

じゅうあくごぎやく

つみ

むほんはちぎやく

とが

は、十悪五逆の罪にもあらず、謀反八虐の失にてもあら

あくちしき

あ

ほけきよう

しんじん

ごんきよう

ず。ただ悪知識に値つて法華經の信心をやぶりて権經に

移

てんだいだいし

しゃく

い

あくゆう

うつりしゆえなり。天台大師、釈して云わく「もし悪友に

あ

すなわ

ほんしん

うしな

うんぬん

ほんしん

もう

ほけきよう

値わば則ち本心を失う」云々。「本心」と申すは、法華經

を信ずる心なり。しん「失う」と申すは、うしな法華經の信心を引き

かえて余經へうつる心なり。よきようされば、こころ經文に云わく「し

かも良藥を与うれども、ろうやくあえて服せず」等云々。あた天台云わ

く「その心を失う者は、こころ良藥を与うといえども、うしなしかも

あえて服せず。ふく生死に流浪し、しょうじ他国に逃逝す」云々。るろう

されば、ほけきよう法華經を信ずる人のおそるべきものは、しん賊人・ひと

強盜・きやうとう夜打ち・よう虎狼・ころう師子等よりも、ししとう当時の蒙古のせめより

も、ほけきよう法華經の行者をなやます人々なり。ぎようじや

この世界は第六天の魔王の所領なり。せかい一切衆生は、だいりくてん無始まおう

いらい か まおう けんぞく ろくどう なか にじゅうごう もう 牢

已来、彼の魔王の眷属なり。六道の中に二十五有と申するう

構 っさいしゅじょう い さいし もう 絆

をかまえて一切衆生を入るるのみならず、妻子と申すほだ

打 ふぼ しゅくん もう 網 空 張 とん じん ち

しをうち、父母・主君と申すあみをそらにはり、貪・瞋・癡

さけ 飲 ぶっしょう ほんしん 誑 悪

の酒をのませて仏性の本心をたばらかす。ただ、あくの

肴 勧 さんあくどう だいち ふくが

さかなのみをすすめて三悪道の大地に伏臥せしむ。

ぜん こころ しょうげ ほけきよう しん ひと

たまたま善の心あれば障礙をなす。法華経を信ずる人を

あく お 思 かな

ばいかにもして悪へ堕とさんとおもうに、叶わざれば、

漸 賺 そうじ けこんぎよう 堕

ようやくすかさんがために相似せる華嚴経へおとしつ。

とじゆん ちごん ほうぞう ちようかんとう ほんにやきよう

杜順・智儼・法蔵・澄観等これなり。また般若経へすか

あくゆう かじよう そうせんとう

じんみつきよう

しおとす悪友は嘉祥・僧詮等これなり。また深密経へすか

あくゆう げんじよう じおん

だいにちきよう

しおとす悪友は玄奘・慈恩これなり。また大日経へすか

あくゆう ぜんむい こんごうち ふくう こうぼう じかく ちしようとう

しおとす悪友は善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等

ぜんしゆう

あくゆう だるま えか

これなり。また禅宗へすかしおとす悪友は達磨・慧可等こ

かんぎよう

あくゆう ぜんどう ほうねん

れなり。また観経へすかしおとす悪友は善導・法然これな

だいろうくてん

まおう ちしや み い

ぜんにん

証

り。これは、第六天の魔王が智者の身に入つて善人をたばら

ほけきようだいご

まき

あつきにゆうごしん

と

そうろう

かすなり。法華経第五の巻に「悪鬼入其身」と説かれて候

はこれなり。

とうかく ぼさつ

がんぼん

むみよう

もう

だいあつきみ

たとい等覺の菩薩なれども、元品の無明と申す大悪鬼身に

い 入って、法華經と申す妙覺の功德を障え候なり。いかに
ほけきよう もう みようかく くどく さ そうろう
い いげ ひとびと
いわんや、その已下の人々においてをや。

また第六天の魔王、あるいは妻子の身に入って親や夫を
だいろくてん まおう さいし み い おや おこと

たばらかし、あるいは国王の身に入って法華經の行者を
誑 かくおう み い ほけきよう ぎようじゃ

おどし、あるいは父母の身に入って孝養の子をせむることあ
脅 ふぼ み い こうよう こ 責

り。悉達太子は位を捨てんとし給いしかば、羅睺羅はらま
しったたいし くらい す たま らごら 孕

れておわしませしを、浄飯王「この子生まれて後、出家し
じようぼんおう こう のち しゅつけ

給え」といさめられしかば、魔が子をおさえて六年なり。
たま 諫 ま こ 抑 ろくねん

舍利弗は、昔、禪多羅仏と申せし仏の末世に菩薩の行を
しやりほつ むかし ぜんた らぶつ もう ほとけ まっせ ぼさつ ぎよう

た　ろくじつこう　へ

すで　しじつこう

立てて六十劫を経たりき。既に四十劫ちかづきしかば、

ひやつこう

だいろうくてん　まおう　ぼさつ　ぎよう　じよう

百劫にてあるべかりしを、第六天の魔王、菩薩の行の成

危

おも

ばらもん

まなこ　こ

ぜんことをあぶなしとや思いけん、婆羅門となりて眼を乞

そうい

取

たい

いしかば、相違なくとらせたりしかども、それより退する

こころしゅつたい

しやりほつ

むりようこう

あいだむけんじごく

お

心出来して、舍利弗は無量劫が間無間地獄に堕ちたりし

だいしようこんぶつ

まつ

ろつぴやくはちじゅうおく

だんなとう

くがんとう

ぞかし。大莊嚴仏の末の六百八十億の檀那等は、苦岸等

し　びく

誑

ふ　じ　びく

あだ

の四比丘にたぼらかされて普事比丘を怨みてこそ、

だいちみじんこう

あいだむけんじごく

へ

し　しのうおうぶつ

すえ

大地微塵劫が間無間地獄は経しぞかし。師子音王仏の末の

なんによとう

しょうい　びく

もう

じかい

そう

恃

き　こん　びく

男女等は、勝意比丘と申せし持戒の僧をたのみて喜根比丘

を笑つてこそ無量劫が間地獄に堕ちつれ。

いま にちれん でしだんなとう

当

ほけきよう

今また日蓮が弟子檀那等はこれにあたれり。法華経には

によらい げん いま

おんしつおお

めつど

のち

「如来の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後

い いっさいせけん あだおお

しん がた

をや」。また云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」。

ねはんぎよう い よこ

しおう

かか

かしく

めにく

べんじよう

涅槃経に云わく「横しまに死殃に羅り、呵責・罵辱・鞭杖・

へいけい きが こんく

とう

げんぜ

きようほう

う

閉繫・飢餓・困苦、かくのごとき等の現世の軽報を受けて、

じごく お とううんぬん

はつないおんぎよう

い

えぶくた

地獄に堕ちず」等云々。般泥洹経に云わく「衣服足らず、

おんじきそ そ たから もと

り

ひんせん

いえ

じゃけん

飲食麤疎、財を求むるに利あらず、貧賤の家および邪見の

いえ う

おうなん あ

よ

しゅじゆ

にんげん

家に生まれ、あるいは王難に遭い、および余の種々の人間の

くほう

げんぜ

かる う

ごほう

くどくりき

よ

苦報あらん。現世に軽く受くるは、これ護法の功德力に由る

ゆえ

とううんぬん

もん

こころ

われ

かこ

しょうほう

ぎよう

が故なり」等云々。文の心は、我ら過去に正法を行じけ

もの

怨

いま

しんじゆ

る者にあだをなしてありけるが、今かえりて信受すれば、

かこ

ひと

さまた

つみ

みらい

だいじごく

お

過去に人を障げつる罪にて未来に大地獄に墮つべきが、

こんじよう

しょうほう

ぎよう

くどくごうじよう

みらい

だいく

招

今生に正法を行ずる功德強盛なれば、未来の大苦をまね

越

しょうく

あ

きこして少苦に値うなり。

きようもん

かこ

ひぼう

様

々

かほう

受

この經文に、過去の誹謗によりてようようの果報をうく

ひんけ う

じゃけん

いえ

う

るなかに、あるいは貧家に生まれ、あるいは邪見の家に生ま

おうなん

あ

とううんぬん

なか

じゃけん

いえ

もう

れ、あるいは王難に値う等云々。この中に「邪見の家」と申

ひぼうしょうほう

いえ

おうなん

とう

もう

あくおう

う

すは誹謗正法の家なり。「王難」等と申すは悪王に生まれ

ふた

だいなん

おのおの

み

あ

覚

あうなり。この二つの大難は各々の身に当たつておぼえつ

かこ

ほうぼう

つみめつ

じゃけん

ふぼ

責

べし。過去の謗法の罪滅せんとて、邪見の父母にせめられさ

たも

ほけきよう

ぎようじゃ

怨

こくしゆ

値

きようもん

せ給う。また法華經の行者をあだむ国主にあえり。經文

めいめい

きようもんかつかく

わ

み

かこ

ほうぼう

もの

明々たり、經文赫々たり。我が身は過去に謗法の者なりけ

うたが

たも

うたが

げんぜ

きようくしの

ること疑い給うことなかれ。これを疑つて現世の軽苦忍

じふ

したが

ぞん

ほか

ほけきよう

びがたくて、慈父のせめに随つて、存の外に法華經をすつ

由

るよしあるならば、我が身地獄に墮つるのみならず、悲母も

じふ

だいあびじごく

お

悲

うたが

慈父も大阿鼻地獄に墮ちて、ともにかなしまんこと疑いな

かるべし。大道心と申すはこれなり。

おのおのずいぶん ほけきよう しん

各々随分に法華經を信ぜられつるゆえに、過去の重罪を

責 出 たま そろろう

くろがね

鍛

せめいだし給いて候。たとえば、鉄をよくよくきたえば

傷 現 いし 焼 灰

きずのあらわるるがごとし。石はやけばはいとなる。金は

しんきん

やけば真金となる。

たび 真 ごしんよう

この度こそまことの御信用はあらわれて、法華經の十羅刹

しゆご たも そろろう せつせんどうじ まえ げん

も守護せさせ給うべきにて候らめ。雪山童子の前に現ぜし

らせつ たいしやく し びおう 鳩 びしやもんでん じゅうらせつ

羅刹は帝釈なり。尸毘王のはとは毘沙門天ぞかし。十羅刹、

こころ たま ふ ぼ み い たま 責 たも

心み給わんがために、父母の身に入らせ給いてせめ給うこ

ともやあるらん。それにつけても、心あさからんことは

こうかい

後悔あるべし。

ぜんしや

覆

こうしや

戒

いま

よ

また前車のくつがえすは後車のいましめぞかし。今の世に

どうしん

発

よ

は、なにとなくとも道心おこりぬべし。この世のありさま、

いと

いと

にほん

ひとびと

さだ

だいく

あ

厭うともよも厭われじ。日本の人々、定めて大苦に値いぬ

み

そうろう

がんぜん

ぶんえいくねんにがつ

じゅういちにち

と見えて候。眼前のことぞかし。文永九年二月の十一日

盛

はな

おおかせ

折

すずし

たいか

に、さかなりし花の大風におるるがごとく、清絹の大火に

焼

やかるるがごとくなりしに、世をいとう人のいかでかなか

よ

厭

ひと

ぶんえいじゅういちねん

じゅうがつ

壱岐

対

馬

府

るらん。文永十一年の十月、ゆき・つしま・ふのものと

いちじ しびと

ひと うえ 思

もの一時に死人となりしことは、いかに人の上とおぼすか。

とうじ 彼 打 手 む ひとびと 歎 お

当時もかのうつてに向かいたる人々のなげき、老いたる

親 こ め 愛 住 処 打 捨

おや、おさなき子、わかき妻、めずらしかりしすみかうちす

由 うみ 守 くも 見 旗 うたが

てて、よしなき海をまぼり、雲のみうればはたかと疑い、

釣 舟 見 ひようせん きもこころ 消 ひ いち に どやま

つりぶねのみゆれば兵船かと肝心をけす。日に一・二度山

よる さん し どうま 鞍 置 げんしん しゅらどう

へのぼり、夜に三・四度馬にくらをおく。現身に修羅道を

感

かんぜり。

おのおの 責 たも せん こくしゆ

各々のせめられさせ給うことも、詮ずるところは国主の

ほけきよう 敵 故 こくしゆ

法華経のかたきとなれるゆえなり。国主のかたきとなるこ

じさいとう

ねんぶつしやとう

しんごんしとう

ほうぼう

起

とは、持齋等・念仏者等・真言師等が謗法よりおこれり。

こんど

念

暮

ほけきよう

ごりしようこころ

たま

今度にようじくらしして法華經の御利生心みさせ給え。

にちれん

ごうじよう

てん

もう

あ

そうろう

謙

日蓮もまた強盛に天に申し上げ候なり。いよいよ、へる

こころ根

姿

さだ

によにん

こころ

弱

心ね・すがたおわすべからず。定めて、女人は心ゆわきに

御前

こころ

翻

ておわすれば、ごぜんたちは心ひるがえりてやおわすらん。

強盛

齒齧

弛

こころ

れい

にちれん

ごうじようにはがみをして、たゆむ心なかれ。例せば、日蓮

へいのさえものじよう

打

振

舞

言

が平左衛門尉がもとにてうちふるまいいいしがごとく、す

謙

こころ

和田

こ

こしもへる心なかれ。わだが子となりしもの、

若狭

守

こ

まさかど

さだとう

ろうじゆうとう

わかさのかみが子となりし、将門・貞任が郎従等となりし

もの ほとけ 成 みち

恥

いのち 惜

者、仏になる道にはあらねども、はじをおもえば命おし

なら

いちど

し

いちじよう

色

まぬ習いなり。なにとなくとも一度の死は一定なり。いろば

悪

ひと

笑

たも

しあしくて人にわらわれさせ給うなよ。

覚

東

そうら

だいじ

ひと

もう

あまりにおぼつかなく候えば、大事のものがたり一つ申

はく夷

しゆく 斉

もう

もの

こちくこく

おう

ににん

ちし

す。伯い・叔せいと申せし者は、孤竹国の王の二人の太子

ちち

おう

おとうと

しゆく

くらい

譲

たま

ちち 死

なり。父の王、弟の叔せいに位をゆずり給いき。父しし

のち

しゆく

くらい

即

はく

い

くらい

て後、叔せい位につかざりき。伯いが云わく「位につき

たま

しゆく

い

あに

くらい っ

たま

はく

い

給え」。叔せいが云わく「兄、位継ぎ給え」。伯いが云わ

おや

ゆいごん

違

たも

もう

おや

く「いかに親の遺言をばたがえ給うぞ」と申せしかば、「親

ゆいごん

の遺言はさることなれども、いかんが兄をおきては位には

あに

くらい

っ

じたい

ににんとも

ふぼ

くに

たこく

即くべき」と辞退せしかば、二人共に父母の国をすてて他国

へわたりぬ。

しゅう

ぶんおう

仕

ぶんおう

いん

ちゅうおう

う

周の文王につかえしほどに、文王、殷の紂王に打たれ

ぶおう

ひやつかにち

うち

戦

起

はく夷

しゆく

齊

しかば、武王、百箇日が内いくさをおこしき。伯い・叔せい

ぶおう

うま

くち

諫

い

親

死

は、武王の馬の口にとりつきて、いさめて云わく「おやしし

のち

さんかねん

うち

起

ふこう

て後、三箇年が内いくさをおこすは、あに不孝にあらずや」。

ぶおう

怒

はく

しゆく

う

たいこうぼう

武王いかりて伯い・叔せいを打たんとせしかば、太公望

制

う

ふたり

おう

疎

首

陽

せいして打たせざりき。二人はこの王をうとみて、すようと

もう やま 隠 居 蕨 折 いのち 続

申す山にかくれいて、わらびをおりて命をつぎしかば、

まし もう もの行 合 い

麻子と申す者ゆきあいて云わく「いかにこれにはおわする

ふたりかみくだん

語

ぞ」。二人上件のことをかたりしかば、麻子が云わく「さ

おう もの

ふたり責

るにては、わらびは王の物にあらずや」。一人せめられて、

とき

食

てん

けんじん

捨

たま

習

その時よりわらびをくわず。天は賢人をすて給わぬならい

てん はくろく

げん

ちち

ふたり

しゆく

なれば、天、白鹿と現じて乳をもつて二人をやしないき。叔

齊 い

はくろく

ちち

飲

せいが云わく「この白鹿の乳をのむだにもうまし。まして肉」

夷 制

てん

聞

きた

といいしかば、伯いせいせしかども、天これをききて来ら

ふたり飢

し

いっしょう

あいだけん

ひと

いちごん

み

ず。二人うえて死ににき。一生が間賢なりし人も一言に身

滅

おのおの

みこころ

うち

知

そうら

をほろぼすにや。各々も御心の内はしらず候えば、おぼつ

かなし、おぼつかなし。

しやかによらい

たいし

とき

ちち

じようぼんおう

たいし

惜

釈迦如来は太子にておわせし時、父の浄飯王、太子をお

しゅつけ

たま

しもん

にせんにな

しみたてまつりて出家をゆるし給わず。四門に二千人の

兵

据

守

たま

つい

親

みこころ

つわものをすえてまぼらせ給いしかども、終におやの御心

違

いえ

出

たま

いっさい

したが

をたがえて家をいでさせ給いき。一切はおやに随うべきに

そうら

ほとけ

成

みち

したが

こうよう

もと

てこそ候えども、仏になる道は随わぬが孝養の本にて

そうろう

しんじかんぎよう

こうよう

もと

説

たも

候か。されば、心地観経には孝養の本をとかせ給うには、

おん

す

むい

い

しんじつ

おん

ほう

もの

とう

「恩を棄てて無為に入るは、真実に恩を報ずる者なり」等

うんぬん　いうところ

真　どう　い

ふ　ぼ　ところ　したが

云々。言は、まことの道に入るには、父母の心に随わ

い　え　い　ほとけ

おん　報

ずして家を出でて仏になるが、まことの恩をほうずるにて

はあるなり。

せけん　ほう

ふ　ぼ　む　ほん

起

したが

世間の法にも、父母の謀反なんどをおこすには、随わぬ

こうよう

そうろう

こうきよう

もう

げきよう

み

そうろう

が孝養とみえて候ぞかし。孝経と申す外経に見えて候。

てんだいだいし

ほけきよう

さんまい

い

たま

とき

天台大師も法華經の三昧に入らせ給いておわせし時は、

ふ　ぼ

そう

膝

じゅう

ぶつどう

障

たま

父母、左右のひざに住して仏道をさえんとし給いしなり。

てんま

ふ　ぼ

形

現

障

これは天魔の父母のかたちをげんじてさうるなり。

はく夷

叔

齊

いんねん

前

書

そうら

だいいち

伯い・すくせいが因縁はさきにかき候いぬ。また第一の

いんねん

にほんこく

にんのうだいじゅうろくだい

おう

おうじんてんのう

因縁あり。日本国の人王第十六代に王おわしき。応神天皇

もう

いま

はちまんだいぼさつ

おう

みこににん

と申す。今の八幡大菩薩これなり。この王の御子二人まし

ちやくし

にんとく

じなん

うじのみこ

てんのう

じなん

うじのみこ

ます。嫡子は仁徳、次男は宇治王子。天皇、次男・宇治王子

くらい

たま

おう

崩

御

たま

のち

に位をゆずり給いき。王、ほうぎよならせ給いて後、

うじのみこい

あに

くらい

即

たも

あに

い

宇治王子云わく「兄、位につき給うべし」。兄の云わく「い

親

おん

用

たま

かにおやの御ゆずりをばもちいさせ給わぬぞ」。かくのごと

互

論

さんかねん

あいだ

くらい

おう

くたがいにろんじて、三箇年が間、位に王おわせざりき。

ばんみん

歎

言

てんか

災

万民のなげきいうばかりなし。天下のさいにてありしほど

うじのみこい

われ生

あ

兄

くらい

つ

に、宇治王子云わく「我いきて有るゆえに、あに位に即か

たま

せ給わず」といつて死なせ給いにき。仁徳にんとくこれをなげかせ給たま

伏 沈

たま

うじおうじ生

返

いて、またふししずませ給いしかば、宇治王子いきかえり

様々

仰

置

たま

引

入

たま

て、ようようにおおせおかせ給いて、またひきいらせ給い

にんとく

くらい

即

たま

くに 穩

ぬ。さて、仁徳、位につかせ給いたりしかば、国おだやか

うえ

新 羅

百

濟

高

麗

にほんこく

なる上、しんら・はくさい・こうらいも日本国にしたがい

年

貢 はちじつ

艘

供

見

そうら

て、ねんぐ八十そうそなえけるとこそみえて候え。

けんおう

きようだい

穩

例

賢王のなかにも兄弟おだやかならぬれいもあるぞかし。

契

きようだい

じようぞう

じようげん

いかなるちぎりにて兄弟かくはおわするぞ。浄蔵・浄眼

ににん

たいし

う

やくおう

やくじよう

の二人の太子の生まれかわりておわするか、薬王・薬上の

ににん

たいふのさかんの

おん

親

ごかんき

承

二人か。大夫志殿の御おやの御勘気はうけたまわりしかど

兵

衛

さかんの

こんど

兄

付

たま

も、ひようえの志殿のことは今度はよもあににはつかせ給

たいふのさかんの

ごふしん

わじ。さるにては、いよいよ大夫志殿のおやの御不審は、

許

そうら

童

おぼろけにてはゆりじなんどおもいて候えば、このわらわ

つるおう

もう

そうろう

ごどうしん

もう

そうら

〈鶴王〉の申し候はまことにてや。「御同心」と申し候え

不思議

べつ

おんふみ

進

そうろう

みらい

ば、あまりのふしぎさに別の御文をまいらせ候。未来ま

物

語

こと

過

そうろう

でのものがたり、なに事かこれにすぎ候べき。

さいいき

もう

ふみ

書

そうろう

がつし

ばらなしこくせろくりん

西域と申す文にかきて候は、月氏に婆羅痾斯国施鹿林

もう

ひと

いんし

せん

ほう

じよう

と申すところに一りの隠士あり。仙の法を成ぜんとおもう。

がりやく　へん

たから

にんちく

かたち

変

すでに瓦礫を變じて宝となし、人畜の形をかえけれども、

ふううん

乗

せんぐう

遊

いまだ風雲にのつて仙宮にはあそびざりけり。このことを

じよう

ひと

れっし

語

ちようとう

成ぜんがために、一りの烈士をかたらい、長刀をもたせ

だん

すみ

た

いき

隠

ことば

絶

宵

朝

て壇の隅に立てて、息をかくし、言をたつ。よいよりあした

物言

せん

ほうじよう

せん

もと

にいたるまでものいわずば、仙の法成ずべし。仙を求むる

いんし

だん

なか

ざ

て

ちようとう

くち

じんじゆ

隠士は、壇の中に坐して、手に長刀をとつて口に神呪を

誦

やくそく

い

し

ずうす。約束して云わく「たとい死なんとする」とありと

ものい

れっし

し

もの

も、物言うことなかれ」。烈士云わく「死すとも、物いわじ」。

よなか

夜

明

かくのごとくしてすでに夜中をすぎて、よまさにあけなん

とす。いかながおもいけん、あけんとする時、烈士おおき

に声をあげてよばわる。すでに仙の法成ぜず。

隠士、烈士に云わく「いかに約束をばたがうるぞ。くち惜

しきことなり」と云う。烈士歎いて云わく「少し眠つてあ

りつれば、昔仕えし主人自ら来つて責めつれども、師の恩

厚ければ、忍んで物いわず。彼の主人怒つて頸をはねんと云

う。しかれども、またものいわず。ついに頸を切りつ。中陰

に趣く我が屍を見れば、惜しく歎かし。しかれども、物

いわず。ついに南印度の婆羅門の家に生まれぬ。入胎・出胎

だいくしの

するに、大苦忍びがたし。しかれども、息を出ださず。ま

もの

かんじや

め 娶

おやし

た物いわず。すでに冠者となりて妻をとつぎぬ。また親死し

こ 儲

ぬ。また子をもうけたり。かなしくもあり、よろこばしく

もの

ねんろくじゆうゆうご

もあれども、物いわず。かくのごとくして年六十有五にな

わ め

い

なんじ

もの

なんじ

りぬ。我が妻かたりて云わく『汝もし物いわずば、汝が

愛

こ ころ

い

とき

われおも

われ

いとおしみの子を殺さん』と云う。時に我思わく『我すで

としおとろ

こ

ころ

こ

儲

に年衰えぬ。この子をもし殺されなば、また子をもうけが

おも

こえ

発

たし』と思いつるほどに、声をおこすとおもえば、おどろ

い

し い

ちからおよ

われ

なんじ

ま

きぬ」と云いければ、師が云わく「力及ばず。我も汝も魔

誑

にたぼらかされぬ。

つい

終にこのこと成ぜず」と云いければ、

れっしとおお

なげ

われこころ

し

せん

ほう

じょう

烈士大いに歎きけり。「我心よわくして師の仙の法を成ぜ

い

いんし

い

わ

とが

せん

ほう

じょう

ず」と云いければ、隠士が云わく「我が失なり。兼ねて誠

く

れっし

し

おん

ほう

めざりけることを」と悔ゆ。しかれども、烈士、師の恩を報

なげ

おも

じ

死

書

ぜざりけることを歎いて、ついに思い死ににししぬとかか

そうろう

れて候。

せん

ほう

もう

かんど

じゆか

い

がつし

げどう

仙の法と申すは、漢土には儒家より出で、月氏には外道の

ほう
いちぶん

い

な

ぶつきよう

しょうじようあごんきよう

およ

法の一分なり。云うにかい無き仏教の小乗阿含経にも及

つう

べつ

えん

ほけきよう

およ

ばず。いわんや通・別・円をや。いわんや法華経に及ぶべ

しや。あさかかる浅きことだにも、じよう成ぜんとすれば四魔競つて

じよう成じがたし。ほけきよういかにいわんや、ごくり法華經の極理、

なんみようほうれんげきようなんみようほうれんげきようしちじしちじはじはじたもたもにほんこくにほんこくぐつうぐつうはじはじ

ひとひとでしだんなでしだんなひとびとひとびとだいなんだいなんきたきた

ことば言をもつて尽くし難し。つ心をもつておしはかるべしや。がた推ころ量

てんだいいいしされば、天台大師の摩訶止觀と申す文は、天台一期の大事、まかしかんもうふみふみてんだいいちごだいじ

いちだいいしやうぎよう一代聖教の肝心ぞかし。かんじん仏法漢土に渡つて五百余年、南北

じつしの十師、ち智は日月に齊しく、にちがつ徳は四海に響きしかども、い

いちだいいしやうぎようまだ一代聖教の浅深・勝劣、せんじん前後・次第には迷惑してこ

そちら

ちしやだいしふたた

ぶつきよう

明

たも

そ候いしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみ

みようほうれんげきよう

ごじ

くら

なか

いちねんさんぜん

によい

ならず、妙法蓮華經の五字の蔵の中より一念三千の如意

ほうしゆ

と

い

さんごく

いつさいしゆじよう

あた

たま

宝珠を取り出だして、三国の一切衆生にあまねく与え給え

ほうもん

かんど

はじ

がっし

ろんじ

り。この法門は、漢土に始まるのみならず、月氏の論師ま

あ

たま

しやうあんだいししやく

い

でも明かし給わぬことなり。しかれば、章安大師釈して云

しかん

みようじよう

ぜんだい

き

うんぬん

わく「止観の明静なることは、前代にいまだ聞かず」云々。

い

てんじく

だいろん

たぐ

とう

また云わく「天竺の大論すら、なおその類いにあらず」等

うんぬん

云々。

うえ

まかしかん

だいご

まき

いちねんさんぜん

いまいちじゆうた

その上、摩訶止観の第五の巻の一念三千は、今一重立ち

い ほうもん ほうもん もう かなら ましゅつたい
入りたる法門ぞかし。この法門を申すには、必ず魔出来す

まきそ しょうほう し
べし。魔競わずば、正法と知るべからず。

だいご まき い ぎょうげすで つと さんしやうし ま ふんぜん
第五の巻に云わく「行解既に勤めぬれば、三障四魔、紛然

きそ お ないししたが おそ
として競い起こる乃至随うべからず、畏るべからず。これ

したが ひと ひき あくどう む おそ
に随えば、人を将いて悪道に向かわしむ。これを畏るれば、

しょうほう しゆ さまた とううんぬん しゃく にちれん み
正法を修することを妨ぐ」等云々。この釈は、日蓮が身に

あ もんけ みやうきやう つつし なら つた
当たるのみならず、門家の明鏡なり。謹んで習い伝えて

みらい しりやう
未来の資糧とせよ。

しゃく さんしやう もう ぼんのうしやう ごうしやう ほうしやう
この釈に三障と申すは、煩惱障・業障・報障なり。

ぼんのうしよう

もう

とん

じん

ちとう

しょうげしゅつたい

煩惱障と申すは、貪・瞋・癡等によりて障礙出来すべし。

ごうしよう

もう

さいしとう

しょうげしゅつたい

ほうしよう

もう

業障と申すは、妻子等によりて障礙出来すべし。報障と申

こくしゅ

ふぼとう

しょうげしゅつたい

しま

なか

すは、国主・父母等によりて障礙出来すべし。また四魔の中

てんしま

もう

に天子魔と申すもかくのごとし。

いま

にほんこく

われ

しかん

え

われ

しかん

え

今、日本国に「我も止観を得たり、我も止観を得たり」

い

ひとびと

たれ

さんしようし

まきそ

ひと

したが

した

と云う人々、誰か三障四魔競える人あるや。「これに随え

ひと

ひき

あくどう

む

もう

さんあくどう

ば、人を將いて惡道に向かわしむ」と申すは、ただ三惡道の

にんてん

くかい

みなあくどう

書

ほけきよう

みならず、人天、九界を皆惡道とかけり。されば、法華經を

除

けごん

あごん

ほうどう

はんにや

ねはん

だいにちきようとう

のぞいて華嚴・阿含・方等・般若・涅槃・大日經等なり。

てんだいしゅう のぞ よ しちしゅう ひとびと ひと あくどう む

天台宗を除いて余の七宗の人々は、人を悪道に向かわし

ごくそつ てんだいしゅう ひとびと なか ほけきよう しん

むる獄卒なり。天台宗の人々の中にも、法華經を信ずるよ

ひと にぜん あくどう ひと 遣

うにて人を爾前へやるは、悪道に人をつかわす獄卒なり。

いま ふたり ひとびと いんし れっし ひと 欠

今、二人の人々は隠士と烈士とのごとし。一りもかけな

じよう たと とり ふた はね ひと りようがん

ば成ずべからず。譬えば、鳥の二つの羽、人の両眼のご

とし。

ふたり ごぜん ひとびと だんな によにん

また二人の御前たちはこの人々の檀那ぞかし。女人とな

もの したが もの したが み おとこ

ることは、物に随つて物を随える身なり。夫たのしくば妻

栄 おとこぬすびと め ぬすびと

もさかうべし。夫盗人ならば妻も盗人なるべし。これひと

こんじよう

えに、今生ばかりのことにはあらず。世々生々に、影と

せぜしうじよう

かげ

み はな み ね は

身と、花と果と、根と葉とのごとくにておわするぞかし。木

住 むし き 食 みず うお みず 食

しば 枯

にすむ虫は木をはむ。水にある魚は水をくらう。芝かるれ

らん 泣 まつ 栄 かしわ

そうもく

ば蘭なく、松さかうれば柏よろこぶ。草木すら、かくのご

ひよく もう とり み ひと かしらふた ふた

とし。比翼と申す鳥は、身は一つにて頭二つあり。二つの口

い もの いっしん やしな 比 目 もう うお いちもく

より入る物、一身を養う。ひぼくと申す魚は、一目ずつあ

ゆえ いっしよう あいだ 離 おとこ め

る故に、一生が間はなるることなし。夫と妻とは、かく

ほうもん おとこ がい

のごとし。この法門のゆえには、たとい夫に害せらるると

く いちどう おとこ こころ 諫

りゆうによ

も、悔ゆることなかれ。一同して夫の心をいさめば、竜女

あと 繼 まつだいあくせ によにん じようぶつ てほん な たも
が跡をつぎ、末代悪世の女人の成仏の手本と成り給うべし。

かくのごとくおわさば、たといいかなることありとも、日蓮、
にちれん

にしよう にてん じゅうらせつ しゃか たほう もう じゅんじしよう ほとけ
二聖・二天・十羅刹・釈迦・多宝に申して、順次生に仏に

成
なしたてまつるべし。

こころ し こころ し ろくはらみつきよう
「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」とは六波羅蜜經

もん
の文なり。たといいかなるわずらわしきことありとも、夢に
煩 ゆめ

ほけきよう 捌 たも
なして、ただ法華經のこのみさばくらせ給うべし。

なか にちれん ほうもん いにしえ しん いま さきさき
中にも日蓮が法門は古こそ信じがたかりしが、今は前々

言 置 すで 合 由 ぼう ひとびと く
いいおきしこと既にあいぬれば、よしなく謗ぜし人々も悔ゆ

る心あるべし。

のち しん

なんによ

おのおの

代

おも

たといこれより後に信ずる男女ありとも、各々にはかえ思

はじ

しん

せけん

うべからず。始めは信じてありしかども、世間のおそろしさ

捨

ひとびと

数

なか

かえ

もと

ぼう

に、すつる人々かずをしらず。その中に、返つて本より謗ず

ひとびと

べうじよう

謗

ひとびと

数

多

ざいせ

る人々よりも強盛にそしる人々またあまたあり。在世にも、

ぜんしようびくとう

はじ

しん

のち

捨

善星比丘等は、始めは信じてありしかども、後にすつるの

かえ

ほとけ

謗

たてまつ

ほとけ

かな

たま

みならず、返つて仏をぼうじ奉りしゆえに、仏も叶い給

むけんじごく

墮

わず、無間地獄におちにき。

おんふみ

べつ

兵

衛

さかんの

進

そうろう

この御文は別してひようえの志殿へまいらせ候。また

たいふのさかんの
にようぼう

ひゆえのさかんの
にようぼう

もう 聞

大夫志殿の女房、兵衛志殿の女房によくよく申しきか

たも

せさせ給うべし、きかせさせ給うべし。南無妙法蓮華經、

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經。

しがつ にち

四月 日

にちれん かおう

日蓮 花押